

# 生成文法理論における再帰代名詞束縛の諸問題\*

長谷川 宏

## 1. 序論

ノーム・チョムスキー (Noam Chomsky) が1950年代に生成文法理論を提唱して以来、再帰代名詞等の「束縛 (binding)」、すなわち再帰代名詞等とその先行詞 (もしくは「束縛要素 (binder)」) との関係はどのような条件の下で成立するか、という問題は、統語理論上の主要な課題とされ続けてきた。

もっとも初期の生成文法理論では、「先行 (precede)」と「統御 (command)」の概念を用いた束縛の説明が試みられた。X が Y を「統御 (command)」するとは、X を支配する最小の節が Y を支配するということである。初期の生成文法の考え方に基づく、再帰代名詞の束縛条件は以下のように整理できる (cf. Lees and Klima (1963), Langacker (1969))。<sup>1</sup>

- (1) 再帰代名詞の束縛要素 (binder) (= 先行詞) は、
  - a. 再帰代名詞に先行 (precede) していなければならない。
  - b. 再帰代名詞と相互に統御 (command) していなければならない、すなわち、再帰代名詞と同じ最小の節内に属する「同節要素 (clause mate)」でなければならない。
- (2)
  - a. [s John<sub>i</sub> hates himself<sub>i</sub>].
  - b. \*[s John<sub>i</sub> thinks that [s Mary hates himself<sub>i</sub>]].
  - c. \*[s That [s John<sub>i</sub> was fat] bothered himself<sub>i</sub>].
  - d. [s John showed Mary<sub>i</sub> herself<sub>i</sub> (in the mirror)].
  - e. \*[s John showed herself<sub>i</sub> Mary<sub>i</sub> (in the mirror)].

(2a) の文においては、再帰代名詞 *himself* を束縛 (bind) する *John* が、*himself* に先行 (precede) しており、かつ *John* と再帰代名詞 *himself* とが相互に統御 (command) している、すなわち *John* と *himself* とが同じ最小の節 (S で標示) に含まれる「同節要素」であるため、束縛が可能となっている。これに対し、(2b, c) では (潜在的) 束縛要素 *John* が再帰代名詞 *himself* に先行しているが、*John* は *himself* と相互に統御していない、すなわち *John* と *himself* は同じ最小の節に含まれる同節要素でないため、束縛が不可能である。さらに (2e) では、(潜在的) 束縛要素 *Mary* は再帰代名詞 *herself* と相互に統御する同節要素であるが、*Mary* が *herself* に先行していないので、束縛が不可能となる。<sup>2</sup>

\* 本稿は、専修大学における「文部科学省 私立大学学術研究高度化推進事業 オープン・リサーチセンター整備事業『アンダロサクソン語の継承と変容』」の助成を受けて執筆されたものである。ここに記して謝辞としたい。

<sup>1</sup> 初期の生成文法では、Lees & Klima (1963) 等により再帰代名詞化 (reflexivization) という一種の変形 (transformation) が提案され、(ia) にこの変形が適用された結果 (ib) が派生されると考えられた。

(i) a. John hates John.  
b. John hates himself.

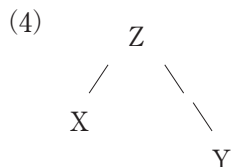
このような考え方はさまざまな理由からその後破棄され、これに代わって、あらかじめ基底生成された再帰代名詞等とその先行詞との間に「束縛 (binding)」の関係が成立するメカニズムを解明しようとするアプローチが広く採用されるようになった。本稿では初期の生成文法における再帰代名詞化の分析を、その後採用された再帰代名詞基底生成による束縛の考え方に基づいて翻案した形で記述している。

<sup>2</sup> なおその後 Jackendoff (1972) が、いわゆる picture noun reflexive (John saw a picture of himself. / \*John didn't like Mary's portrait of himself.) なども考慮に入れ、「統御 (command)」の概念を節だけでなく名詞句にも拡張して定義する提案を行っている。

## 2. Reinhartによる c 統御の概念の導入

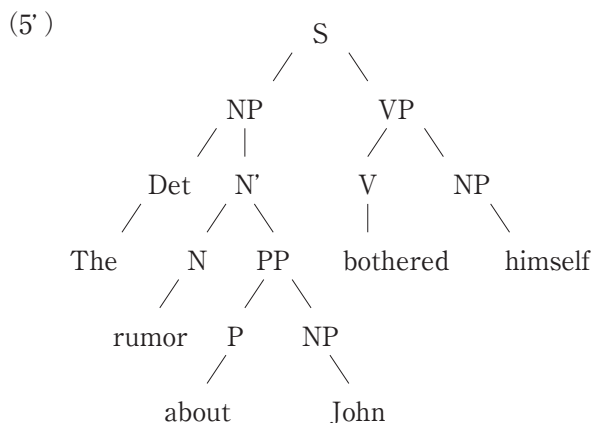
Reinhart (1976, 1983) が導入した「c 統御 (c-command)」の概念は、その後の再帰代名詞等の束縛現象研究の方向性を決定付けることとなった。c 統御の概念は以下のように定義される。

- (3) Xを直接支配 (immediately dominate) する枝分かれ接点 (branching node) ZがYを支配するとき、XはYをc 統御する。



たとえば (5) において、(潜在的) 束縛要素 *John* は、再帰代名詞 *himself* を c 統御しない。名詞句 *John* を直接支配する枝分かれ接点 PP が *himself* を支配していないからである。

- (5) \*The rumor about John<sub>i</sub> bothered himself<sub>i</sub>



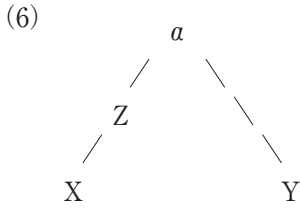
このように c 統御の概念を束縛関係の条件として導入することにより、(潜在的) 束縛要素 *John* と再帰代名詞 *himself* の先行関係にかかわらず、*John* が *himself* を c 統御するか否かという構造的関係から、再帰代名詞の束縛の (不) 可能性が説明できると考えられるようになった。<sup>3</sup>

なお、Reinhart (1976, 1983) による c 統御の定義には、さらに以下のような条件が付け加えられている。

- (3') Xを直接支配する枝分かれ接点 (branching node) ZがYを支配するか、またはZを直接支配する *a* が

<sup>3</sup> 先行関係によらず c 統御関係のみによると説明が困難と考えられたのが、上記の (2d) と (2e) の文法性の差である。(潜在的) 束縛要素 *Mary* と再帰代名詞 *herself* との間の c 統御関係は、(2d) と (2e) では差がないと考えられていたからである。この問題は Barss and Lasnik (1986) が提起し、この問題提起に答える形で Larson (1988) が VP-shell 構造を用いた分析を提案した。この分析によれば、二重目的構文における間接目的語 ((2d) における *Mary*) は直接目的語 ((2d) における *herself*) を非対称的 (asymmetrically) に c 統御する (すなわち間接目的語は直接目的語を c 統御するが直接目的語は間接目的語を c 統御しない) ことになり、(2d)、(2e) のような文における束縛関係の問題も解決されたと考えられた。

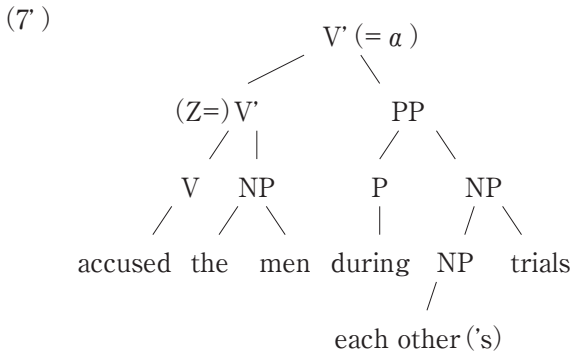
Yを支配しかつZとaが同じ範疇のタイプ (category type) に属するとき、XはYをc統御する。



(3') の定義によれば、(6) で示されたような構造において、*a* がZを直接支配しかつZと*a*が同じ範疇のタイプに属するとき、XはYを(Xを直接支配するZには支配されていないにもかかわらず) c統御することになる。

Reinhart (1976, 1983) が(3') のようなやや複雑な形でc統御を定義したのは、そうすることによってさまざまな事実がうまく説明できるからであったが、その後の多くの研究では(3') ではなく(3) のような単純な定義が採用され、結果としてReinhartの本来の定義である(3') はほとんど忘れ去られてしまった。たとえばLasnik (1999) は、(7) のような文において each other (相互代名詞 (reciprocal pronoun) と呼ばれ、再帰代名詞と同じ照応形 (anaphora) の一種) との束縛関係が可能であることを問題にして、目的語 the men が本来の位置からより高い位置、すなわち一致要素 (AGR) の指定部 (specifier) の位置まで上昇する、という分析の根拠のひとつとしている。

(7) The DA accused the men<sub>i</sub> during each other's<sub>i</sub> trials.



しかしHasegawa (1996) によれば、前置詞句 during each other's trials は(7') に示されたようにV'に付加された付加部 (adjunct) と考えられる。とすればHasegawa (1996) で指摘されているように、(7) において束縛が可能なのは、(3) のような単純化されたc統御の概念を採用すれば問題となるかも知れないが、(3') の定義によれば問題ではなくなる。束縛要素 the men を直接支配するV'が、さらに同じ範疇のタイプに属するV'に直接支配されており、この上のV'が照応形 each other を支配しているからである。したがって、(7) で束縛が可能なのは必ずしも目的語がより高い位置に上昇しているというLasnik (1999) の分析を支える根拠とは言えないことになる。<sup>4</sup>

<sup>4</sup> Lasnik (1999) はこのような分析の根拠としてたとえば(i) のような他の証拠も挙げており、(3') の定義を採用するだけでは解決できない問題もあるので、(7) の文の分析に疑問があるからと言ってただちにLasnik (1999) の議論が否定されるわけではない。

(i) The DA proved the men<sub>i</sub> to be guilty during each other's<sub>i</sub> trials.

なお、(3') の定義でもうまく説明できない他のデータもあることから、Hasegawa (1996) は、Epstein (1999) の派生的 c 統御 (derivational c-command) の概念を発展させることにより、(3') のような複雑な定義をすることなく、(7) を含むさまざまな事実が自然に説明できることを示している。この分析によれば、ある要素 X は派生の過程で「同時に」、すなわち同じ派生のサイクル (cycle) 内で構造に導入された要素 Y および Y が支配する要素を c 統御する。(7) における *during each other's trials* のような PP は付加部 (adjunct) であり構造上必須の要素ではないため、その導入 (「付加 (Adjoin)」) は派生の過程における独自のサイクルを形成せず、目的語 *the men* と同時に (同じサイクル内で) 構造に組み込まれると考えられる。したがってこのような派生的 c 統御の概念の下では、目的語 *the men* は、同時に構造に組み込まれた PP 内の照応形 *each other* を c 統御することになり、(7) の束縛関係は自然に導き出される。

また、c 統御の定義にはその他にも、

- (3'') X を直接支配する枝分かれ接点 (branching node) Z が Y を支配し、X が Y を支配 (dominate) しない とき、X は Y を c 統御する。

という条件が付け加えられることもよくあるが、Reinhart (1983) の定義ではこのような条件はつけられていないことも、忘れられがちな事実である。

(3'') の下線部のような条件を付け加えることで、たとえば次のような構造における束縛の可能性が排除できると考えられる。

- (8) \*<sub>i</sub>[NP the story about itself]<sub>i</sub>

(8) において、NP と標示された名詞句全体は、再帰代名詞 *itself* を支配 (dominate) するため、(3'') の下線部の条件により、再帰代名詞を c 統御せず、したがって再帰代名詞の束縛要素 (binder) にもなれないことになる。

しかしながら、(9) のような構造を排除する i-within-i 条件 (またはそれに相当する意味解釈上の原理) は、再帰代名詞束縛以外の現象に関してもどのみち必要になると考えられる。

- (9) \*<sub>i</sub>[... X<sub>i</sub> ...]<sub>i</sub>

たとえば (10) のような形でのいわゆる「動詞句削除 (VP deletion)」は、(9) のような構造を排除する i-within-i 条件に違反するため、非文となる。

- (10) \*John [<sub>VP</sub> said that he did [<sub>VP</sub> e]<sub>i</sub>]<sub>i</sub>.

とすれば、(8) のような構造も同様に i-within-i 条件によって排除されるため、(3'') の下線部のような条件を c 統御の定義に付け加える必要はないことになる。<sup>5</sup>

### 3. Chomsky (1981) による束縛理論

Chomsky (1981) は、それまでの束縛関係に関する議論を集大成する形で、以下のような束縛条件 (Binding

<sup>5</sup> (3'') の下線部のような条件を付け加えることにともなう問題として、c 統御領域 (c-command domain; Reinhart の (3') の定義では (4) における Z や (6) における  $\alpha$ ) が単一の要素とならなくなってしまう場合があることを Reinhart (1983) は指摘している。しかしこれは三叉枝分かれ (ternary branching) 構造を認めていたからであり、もし Larson (1988) や Kayne (1994) のようにすべての構造は二股枝分かれ (binary branching) 構造であると仮定するならば、(3'') の下線部のような条件をつけたとしても c 統御領域は単一の要素となる。

Conditions) を提案した。

- (11) a. An anaphor must be bound in its governing category.  
 b. A pronoun must be free in its governing category.  
 c. An r-expression must be free.

「統率範疇 (governing category)」の定義等についてはここでは詳述しないが、おおまかに言って当該要素を含む最小の節または名詞句、ということである。<sup>6</sup> この束縛理論は、照応形 (anaphor; 再帰代名詞や相互代名詞 (reciprocal pronoun) の *each other* など)、代名詞 (pronoun)、r 表現 (*John*, *the boy* など普通の名詞句等) のみならず、PRO、名詞句移動の痕跡 (NP trace) などの空範疇 (empty category) の振る舞いまでも説明しようとしたきわめて射程の広い理論であった。

しかし、いくつか問題もあった。たとえば

- (12) a. \*Himself<sub>i</sub> likes John<sub>iv</sub>.  
 b. \*John<sub>i</sub> likes John<sub>i</sub>.

の2つの文の非文法性は、いずれも目的語の John が「自由 (free)」でない、すなわち束縛 (bind) されており (11c) の条件 (いわゆる Condition C) に違反するためであるとされた。<sup>7</sup> しかし、(12b) は文脈と焦点 (focus) の置き方によっては可能な文となることもある。<sup>8</sup>

- (12') A: Who likes John?  
 B: JOHN<sub>i</sub> likes John<sub>i</sub>.

これに対し、(12a) に関してはそのようなことはない。このような差を説明するためには、やはり (12a) の非文法性については再帰代名詞 *himself* の (束縛要素 (binder) を要求するという) 性質に着目する必要があると考えられる。<sup>9</sup>

なお、Chomsky (1986, 1993) を発展させた Hasegawa (2000) の再帰代名詞の移動分析を採用すれば、(12a) の非文法性はうまく説明できる。

- (12') [TP Himself<sub>i</sub> [<sub>VP</sub> t<sub>i</sub> (self<sub>i</sub>) v likes John<sub>i</sub>]].



このような移動分析のもとでは、再帰代名詞を構成する *self* が、(潜在的) 束縛要素である目的語 *John* の認

<sup>6</sup> 厳密には、「統率要素 (governor)」と、「接近可能な『主語』 (accessible SUBJECT)」という概念を用いて「統率範疇 (governing category)」が定義される。

<sup>7</sup> このような分析は、Lasnik (1976) の分析の流れをくむものである。

<sup>8</sup> Tancredi (1995)、Schlenker (2005) などは、(11c) の Condition C のような統語的条件は存在しないと議論している。Schlenker (2005) は、Condition C という統語的条件に対する反例として、以下のような文が可能であることを指摘している。

(i) [A linguist working on Binding Theory]<sub>i</sub> was so devoid of any moral sense that he<sub>i</sub> forced a physicist working on particles to hire the linguist's<sub>i</sub> girlfriend in his lab.


<sup>9</sup> Higginbotham (1983) の、linking の概念を用いた分析はそのような分析の一例と言える。



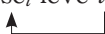
可に関わる主要部  $v$  の位置へ移動しなければならないことになる。移動元の再帰代名詞の位置として動詞句 ( $vP$ ) 内と主語位置のいずれを想定するにせよ、これは一種の lowering (構造上より低い位置への移動) となるため、「適正束縛条件 (Proper Binding Condition)」(またはこの条件に代わって同様の効果をもつと考えられる他の条件、たとえば no-tampering condition (cf. Chomsky (2005), etc.)) に違反し許されないからである。

#### 4. 再帰代名詞の移動分析

Chomsky (1986, 1993) は Lebeaux (1983) の提案を取り入れ、再帰代名詞の移動分析の可能性を示唆した。

- (13) a. John hates himself.  
 b. John  $self_i$ -Infl/T hates  $t_i$ .  

 A horizontal line connects  $t_i$  to Infl/T, with an upward arrow pointing from the line to Infl/T.

(13) に示すように、再帰代名詞は LF 部門で非顕在的 (covert) に、その束縛要素である *John* を指定部にもつ Infl (屈折要素) または T (時制) の位置へと移動すると考えられる。これは、ロマンス語系言語などで見られる顕在的 (overt) な接語 (clitic) の移動と同様の移動が、英語では非顕在的に起っている、というふうに考えることができる。<sup>10</sup>

- (14) Paul<sub>i</sub> se<sub>i</sub> leve  $t_i$ .  

 A horizontal line connects  $t_i$  to se<sub>i</sub>, with an upward arrow pointing from the line to se<sub>i</sub>.

このように考えれば、再帰代名詞束縛の局所性 (locality) は、移動の局所性に帰着できることになる。

Hasegawa (2000) は、この再帰代名詞の移動分析を、ミニマリストプログラムの枠組みの中で捉え直しさらに発展させた。具体的には、*himself* のような再帰代名詞を、代名詞 (*him*) の部分と *self* とに分解する。代名詞部分は、Reinhart (1983) の言う束縛変項 (bound variable) としての解釈を受ける。*Self* の部分は、束縛要素を指定部 (specifier) にもつ主要部 (束縛要素が主語であれば T (時制) の位置) へと移動し「可動指標 (mobile index)」として束縛要素を決定する機能を果たす。このように考えることで、再帰代名詞束縛のメカニズムをミニマリストプログラムに組み込むことができるだけでなく、再帰代名詞束縛に関するさまざまな事実がうまく説明できることを示した。

なお、(7) において束縛関係が成立するということは、再帰代名詞の移動分析にとっては問題となりうる。

- (7) The DA accused the men<sub>i</sub> [during each other's<sub>i</sub> trials].

上述の Hasegawa (1996) で議論されているように、(7) における前置詞句 *during each other's trial* は動詞句内において付加部 (adjunct) の位置を占める。ところが一般に、付加部内からの移動は非文法性を生ずる。

- (15) \*What<sub>i</sub> did the DA accuse the men [during  $t_i$ ]?

これは Huang (1982) が、Condition on Extraction Domain (CED) という条件によって捉えようとした現象である。もし CED が「移動」という操作に対して適用される条件であるとするならば、再帰代名詞の束縛現象を (Hasegawa (2000) で主張されたような) 「移動」ではなく「一致 (Agree)」、特に Hiraiwa (2001) の提唱する「多重一致 (multiple Agree)」の作用する現象として再考することが、上記のような事実を考慮すれば

<sup>10</sup> このような見方に対しては、Reinhart and Siloni (2004) による批判もある。

必要になると考えられる。さらに、「移動」に対する局所性の制約と、「一致」に対する局所性の制約を切り分けて議論する必要も生じてくると考えられるが、このような問題については稿を改めて検討したい。

## 5. おわりに

Chomsky (2000) 等最近のミニマリストプログラムの諸研究では、束縛現象を統語部門から排除し、論理形式 (LF) インターフェイスより外の現象として扱う可能性が提示されている。このような可能性を考慮する上で興味深い示唆を与えているのが、Jackendoff (1992) の議論である。

(16) Ringo fell on himself.

(16) の文は、Ringo 本人が蠟人形館を訪れ、誤って自分の蠟人形の上に倒れ掛かった場合には可能な文であるが、逆に蠟人形が Ringo 本人の上に倒れ掛かった状況では (16) のように言うことはできない。このような言語外の要因が再帰代名詞束縛の可能性に影響を与えるとすれば、統語部門だけで再帰代名詞の束縛現象を説明することはできないと言える。

しかしながら、再帰代名詞の束縛現象に統語部門以外の要因が関わっているということは、同現象が統語部門と無関係であるということを保ずしも意味しない。再帰代名詞の束縛に見られる「局所性 (locality)」の制約は、移動、一致などの統語現象においても共通して観察される特質であり、もし両者が共通の原理に支配されているとすれば、再帰代名詞の束縛についても統語部門における何らかの「計算 (computation)」が関わっている、と考えるのが自然である。しかし従来「束縛 (binding)」としてひとくくりにされてきた現象の中には、統語現象として扱うべきか疑わしい部分もあるのは確かであり (注 8 の Tancredi (1995)、Schlenker (2005) 等参照)、同じ再帰代名詞でも、明らかに (文構造を扱う) 統語部門だけでは処理できない logophoric な用法も観察される。

(17) John was outraged. A picture of himself was on the front page.

一方で、Reinhart and Reuland (1993) のように、再帰代名詞の束縛現象を述語 (predicate) の再帰性 (reflexivity) という語彙意味論的な要因と関連付けて説明しようとする試みもなされている。<sup>11</sup> いわゆる束縛現象のどの部分に、どのような形で統語部門が関わっているのかを明らかにするためには、さらなる研究が必要である。

## 参考文献

- Barss, Andrew and Howard Lasnik (1986) "A Note on Anaphora and Double Objects" *Linguistic Inquiry* 17, 347-354.  
 Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.  
 Chomsky, Noam (1986) *Knowledge of Language*. New York: Praeger.  
 Chomsky, Noam (1993) "A Minimalist Program for Linguistic Theory," *The View from Building 20*, ed. by K. Hale and S. J. Keyser, 1-52, Cambridge, MA: MIT Press.  
 Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries: the Framework," *Step by Step*, ed. by R. Martin et al., 89-155, Cambridge, MA: MIT Press.  
 Chomsky, Noam (2005) "On Phases," Unpublished ms.

<sup>11</sup> Lidz (2001) は Reinhart and Reuland (1993) の分析に対する批判を行っており、オランダ語の 2 種類の再帰代名詞 *zich/zichzelf* について、Jackendoff (1992) で想定されたような特殊な文脈における両者の使い分けによって容認性に差が出るという興味深い事実を指摘している。

(i) Ringo scheert zich/zichzelf. (Ringo shaves himself.)

- Epstein, Samuel D. (1999) "Un-Principled Syntax: The Derivation of Syntactic Relations," *Working Minimalism*, ed. by Samuel D. Epstein and Norbert Hornstein, 317-345, Cambridge, MA: MIT Press.
- Jackendoff, Ray (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. Cambridge, MA: MIT Press
- Jackendoff, Ray (1992) "Mme Tussaud Meets the Binding Theory," *Natural Language and Linguistic Theory* 10, 1-31.
- Hasegawa, Hiroshi (1996) "Adjoin vs. Merge, and the Concept of C-command," *English Linguistics* 13, 15-39.
- Hasegawa, Hiroshi (2000) "A Note on Traces/copies and LF Movement of Reflexives," *UCI Working Papers in Linguistics* 6, 1-16, Univ. of California, Irvine.
- Higginbotham, James (1983) "Logical Form, Binding and Nominals," *Linguistic Inquiry* 14, 395-420.
- Hiraiwa, Ken (2001) "Multiple Agree and the Defective Intervention Constraint in Japanese," *HUMIT 2000 (MIT working papers in linguistics 40)*, 67-80.
- Huang, James C. T. (1982) *Logical Relations in Chinese and the Theory of Grammar*. Doctoral dissertation, MIT.
- Kayne, Richard (1994) *Antisymmetry in Syntax*. MIT Press.
- Langacker, Ronald (1969) "On Pronominalization and Chain of Command," *Modern Studies in English: Readings in Transformational Grammar*, ed. by D. A. Reibel and S. A. Schane, Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Larson, Richard (1988) "On the Double Object Construction," *Linguistic Inquiry* 19, 335-391.
- Lasnik, Howard (1976) "Remarks on Coreference," *Linguistic Analysis* 2, 1-22.
- Lasnik, Howard (1999) *Minimalist Analysis*. Oxford: Blackwell.
- Lebeaux, David (1983) "A Distributional Difference between Reciprocals and Reflexives," *Linguistic Inquiry* 14, 723-730.
- Lees Robert, B. and Edward Klima (1963) "Rules for English Pronominalization," *Language* 39, 17-28.
- Lidz, Jeffrey (2001) "Condition R," *Linguistic Inquiry* 32, 123-140.
- Reinhart, Tanya (1976) *The Syntactic Domain of Anaphora*. Doctoral dissertation, MIT.
- Reinhart, Tanya (1983) *Anaphora and Semantic Interpretation*. London: Croom Helm
- Reinhart, Tanya and Eric Reuland (1993) "Reflexivity," *Linguistic Inquiry* 24, 657-720.
- Reinhart, Tanya and Tal Siloni (2004) "Against Unaccusative Analysis of Reflexives," *The Unaccusativity Puzzle: Explorations of the Syntax-Lexicon Interface*, ed. by Artemis Alexiadou et al., Oxford: Oxford Univ. Press.
- Schlenker, Phillippe (2005) "Minimize Restrictors! (Notes on Definite Descriptions, Condition C and Epithets)," *Proceedings of Sinn und Bedeutung 2004* ed. by Bary, Huitink and Maier, 385-416.
- Tancredi, Christopher (1995) "Eliminating Binding Theory," Unpublished ms.